

10 . 河川の維持管理

10 - 1 問題点と課題

河川の維持管理は、河川の存する地域の特性を踏まえつつ、洪水、高潮等による災害が防止され、河川が適正に利用され、流水の正常な機能が維持され、河川環境の整備と保全がなされるように総合的に行うものである。

(1) 河道内樹木

河道内の樹木については、良好な生態系の保全といった、環境機能を有しているが、樹木の繁茂により洪水時に河積を阻害し水位の上昇を招くといった、治水機能上支障となる場合もあるため樹木の定期的・計画的な維持管理が課題である。

(2) 激特區間の維持管理

留萌川下流市街地区は、昭和 63 年 8 月洪水を期に激特事業により堤防及び護岸は完成している。そのため、再度災害の防止の観点から、アーマー・レビー堤防の機能の維持を図るとともに堤防護岸・矢板護岸の点検、堆少状況の把握、内水排除施設の点検整備など、適切な維持管理が課題である。

(3) 河川情報の提供

留萌川は、過去数度にわたって洪水被害を受けているが、流域の約 90%程度を山地が占め、北海道内では洪水の流出が早く、昭和 63 年洪水では大和田観測所において指定水位を超えてから、わずか 3 時間で計画高水位を越えて溢水に致っており、住民の避難に必要な時間が十分に確保されなかった。そのため、平成 6 年作成のハザードマップの普及・浸透、更に洪水の時間的予測等の有効かつ迅速な情報提供を行い、河川管理の適正化を図ることが課題である。

(4) 地域を一体とした川づくり

留萌川は、河道幅が狭く高水敷がほとんどないが、留萌川下流部は、市街地に近く堤防天端が散策等に利用され、地域住民の憩いの場となっている。また、ラブリバー制度の認定を受け、市民団体による河川清掃も積極的に行われるほか、緑の回廊づくりや河川区域周辺の公園整備も行われている。また、中流部の幌糠地区においても、貴重な水辺空間を利用した水辺の楽校が整備されつつあり、近隣の小中学校の自然環境教育の場として利用されるなど同様のニーズが増えることが予想される。

このような社会的要請を考慮し、住民の河川に関する理解と河川とふれあう機会を増加させ、地域が一体となった川づくりを行うことが課題である。

(5) 健全な水循環系の構築

留萌川の上水道は、地下水が飲料水に適しておらず、現在流域外導水を行っている。しかし、下水道の普及による生活環境の向上を実現するためには水資源開発施設による水道用水の確保や夏期における河口部の水質改善といった環境保全の機能を果たす水の確保等、地域の諸活動と水循環系との調和が課題である。